

次の文章Ⅰと文章Ⅱを読んで、あとの問いに答えなさい。

文章Ⅰ

この前、言われちゃいました。「高村たかむらさんの書く小説は難しい」って。私は社会の観察者だと思っています。社会は複雑で、いろんなものが錯綜さくそうしている。そのことを複雑なまま書き記しているからでしょうか。

でも、社会は単純化して書けないものです。だから、^①物事をスパッと断定調で語る人は信用できません。

自分の主義主張にこだわらずに、社会の観察者になると、物事を深く考えるきっかけになります。インターネットの普及で、情報は簡単に手に入るようになった。でも、多くの人は、自分の関心あることしかクリックしない。

ところが、観察者は周りだけでなく自分も客観視しないといけないから、社会と自分の距離をつかめる。政治のことを「わかんないしい」とか「関係ないしい」とか言わなくなるわけです。

私たちの世代は、若いころ、まだ※教養主義が残っていて、普通に古典も読みました。なのに、そういう風潮を後の世代に引き継がなかった。バブル時代の豊かさに煽あおられ、忙しくなり、子どもに伝える時間を失ってしまったのが原因かもしれません。

科学技術の絶え間ない進歩で、私は人間が脳を使わない方向に流れてしまうと、なかば絶望していました。でも、いま古典を若い世代が自発

的に読もうとしているのなら、救われる思いがします。読んでみて、すべて理解できなくてもいいんです。「わからないことをどれだけ持っているか」が人生の豊かさじゃないでしょうか。

自分で考える力を持つ近道として、興味を持ったテーマについて、少し難しめの本を読んでみてはどうでしょうか。毎日一時間でいいから、ケータイとパソコンの電源を切って、その本を開いてみる。たったひとりで考えを巡らせたとき、自分と社会の距離感や、なにかしらの真理が見えてくるかもしれません。

(高村薫『作家的時評集 2000-2007』による 一部省略した部分がある)

(注) ※教養主義：人格を磨いたり、社会を改善していくために、古典などの名著を読むことを通じて古今のすぐれた思想や生活に接することを重視する態度。

文章Ⅱ

驚田わしだ 僕は教養って価値の遠近法を身に付けることだと思う。以前にア

ートマネジメントをしている友人と、人はどうして美術館に行くのだろうか、という話題になった。解答の一つは「^②ずっと見たかったものを見に行く」。二つ目は「見たことがないものを見に行く」。三つ目は「^{③※}見とかないかんから見に行く」。大切なのは、二つ目と三つ目。

内田 「知識と教養は違う」とよく学生には言います。図書館にある

本は情報化された知識。教養というのは、いわば図書館の全体の構成を知ること。教養というのは知についての知、あるいはおのれの無知についての知のことだと思います。

鷺田 コンテキスト（文脈）をつくっていくということね。

内田 図書館のマップがあれば、自分の読んだ本がどこにあり、読むべき本がどこにあるのか分かる。自分自身の知識がどれほどのもので、自分が知らないことがどういう広がりをもっているかを知ることができる。

鷺田 知的なスキルですね。

内田 知的探求を行っている自分自身の知のあり方について、^④上から鳥観することです。自分の置かれている知的文脈を見る。

なぜ自分はこのことを知らずに来たのか、なぜ知ることを拒んできたのか。^⑤自分の無知の構造に目を向けた瞬間に教養が起動するんだと思います。

わしだ きよかず たつる
(鷺田清一と内田樹による対談 西日本新聞の記事による)

(注) ※見とかないかん：「見ておかないといけない」「見ておく必要が

ある」などを意味する方言。

※鳥観：「鳥瞰」ちようかんとも表記する。